

薬局におけるスピーチプライバシーの保護の現状とその検討

○小山 由美¹, 羽入 俊樹², 星 和磨³, 亀井 美和子⁴, 松本 宣明¹ (¹日本大薬, ²日本大短, ³日本大院, ⁴昭和大薬)

【目的】調剤を行う薬局は医療提供施設と位置づけられる一方で、より身近なそして気軽に訪れられる存在にある。気軽に会話できる環境であることから、医療情報が第三者に知られないための対策は欠かせないものである。また、効果的で効率的な薬物治療を実現するためにもスピーチプライバシーの保護は必要である。我々はこれまでに調剤薬局におけるプライバシー保護の現状とその対策を薬局の機能的側面と物理的側面から検討してきた。今回はそれらの結果を踏まえ、患者の立場からプライバシー保護を調査・検討した。 【方法】首都圏在住の成人男女(20歳~69歳)160人に対しインターネットによるアンケート調査をおこなった。アンケートの質問項目は、薬局薬剤師のインタビュー結果を踏まえ作成した。

【結果】薬局薬剤師を対象とした調査では、薬剤師はプライバシーに十分配慮しており、発生した問題は薬剤師側の理由よりも患者側の理由によるという回答が多かった。患者から得られた答えは単純なものではなく、プライバシー問題と捉えられている薬局のトラブルには、様々な要因が混在していることが明らかとなった。約9割の患者がプライバシー保護の必要性を示し、物理的な保護対策やルール作りなどを広く求めていることが明らかとなった。 【考察】薬局におけるプライバシー問題は、薬剤師の配慮、組織内のルール、音環境といった問題だけではなく、医療の仕組みや情報を共有できない社会問題が背景にあることが明らかとなった。米国では医療情報を共有するためのプライバシー保護法(HIPAA)が存在する。情報を共有する上で必要なプライバシー保護の仕組みを検討することは日本でも必要であり、それが医療の質の向上だけでなく、医療費削減、医療従事者の時間・労力の負担軽減にも寄与すると期待される。